



Title	倫理学における表出主義とその成否
Author(s)	田村, 圭一
Citation	哲学, 39, 1-18
Issue Date	2003-07-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/48037
Type	bulletin (article)
File Information	39_1-18.pdf



[Instructions for use](#)

倫理学における表出主義とその成否

田村 圭一

はじめに

倫理学における表出主義 (expressivism) とは、「道徳的な発話において、発話者は自らの態度を表出する。道徳的な言明は世界のあり様を記述・表象・報告するものではない」という見解である。表出主義者に言わせると、たとえば、「子供の虐待は不正である」という発話において、発話者は子供の虐待に反対する態度を表出している。

表出主義の一形態として、エイヤーの情緒主義 (emotivism) がある。情緒主義とは、「道徳的な発話において、発話者は自らの感情を表出している」という見解である。「子供の虐待は不正である」という道徳的な言明は、子供の虐待に反対する感情を表出するものであり、「子供の虐待反対!」という絶叫として理解される。「子供の虐待反対!」に「真である」、あるいは、「偽である」と述語付けることはできない。「『子供の虐待反対!』は真である」、あるいは、「『子供の虐待反対!』は偽である」は意味をなさない。「子供の虐待は不正である」も「子供の虐待反対!」と同一視されるかぎり、真偽を評価することができない。道徳的な言明は真理値を持たないという意味で、真理適合的 (truth-apt) ではない。情緒主義者は以上のように、道徳的な言明が真偽を評価できないという意味で、非認知的な言明であると考ええる。

しかし、「子供の虐待は不正である」という道徳的な言明は真であるように見えるし、また、「女性は教育を受けるべきではない」は偽であるように見える。情緒主義以後、表出主義は道徳的な言明が真理適合的であると認める方向で、新たな展開を見せる。本稿の関心も情緒主義と差別化される、新しい表出主義にある。以下において、煩を避けるために、情緒主義と異なり、道徳的な言明が真理適合的であるという意味で、認知的な言明であると認める新しい表出主義を、単に「表出主義」と記述する。表出主義者は最早、道徳的な言明と「子供の虐待反対!」のように、真偽を評価できない言明を同一視しない。だから、「子供の虐待は不正である」は「子供の虐待反対!」と異なり、真理適合的であるという可能性が開かれる。しかし、道徳的な言明が態度の表出に係わると考えることは、道徳的な言明が認知的な言明であると認めることと矛盾していないだろうか。また、道徳的な言明が真理適合的であると認められるとしても、さらに、ある種の道徳的な言明が「真である」と述語付けられること、すなわち、道徳的な真理そのものを表出主義と整合的に説明する作業が残っている。本稿はへアを始めとする現代の表出主義者に注目する。本稿の目的は表出主義がへアなどの意図するように、本当に道徳的な真理の可能性を認めることができるかどうか、見極めることである。

第2節で詳述するように、表出主義者はミニマリスト的な真理論に訴えることで、道徳的な真理を説明する。「子供の虐待は不正である」という道徳的な言明に「真である」と述語付けるとは、「子供の虐待は不正である」が何らかの道徳的な実践の内側において正当化されること以上ではない。「子供の虐待は不正である」が真であるとは、私たちの道徳的な実践において、子供の虐待が不正であると評価されることである。私たちの道徳的な実践において「子供の虐待」が既にして「不正である」と述語付けられているという事実以上の、道徳的な真理は存在しない。道徳的な真理は道徳的な実践により構成される。道徳的な真理は道徳的な実践の内側からのみ見出される、価値負荷的な真理である。

表出主義者に言わせると、私たちは『「子供の虐待は不正である」は真である』と語るとき、既にして、何らかの道徳

的な実践に関与している。私たちはある特定の道徳的な実践に関与することで初めて、道徳的な真理を語ることができる。しかし、私たちは何ら道徳的な実践に関与しないで、『子供の虐待は不正である』と語ることができるかもしれない。表出主義に反対する人々に言わせると、道徳的な真理は特定の道徳的な実践に依存するものではない。道徳的な真理は様々な道徳的な実践に中立的なものである。「子供の虐待は不正である」という事実は、何らかの特定の道徳的な実践への関与が前提とされていないという意味で、形而上学的に強固な (robust) 道徳的な事実でなければならないと言われる。道徳的な事実は道徳的な言明の真偽を判定する規準であり、特定の道徳的実践の実態以上のものである。

係争点は道徳的な事実の存在論的な性格である。一方で、表出主義者はあらゆる道徳的な実践に外在的に語ることで不可能であり、道徳的な事実は何らかの道徳的な実践に内在的に構成される価値負荷的な事実であると考えている。他方で、表出主義に反対する人々は、何ら特定の道徳的な実践に関与しないで、道徳的な事実を語ることが可能であり、様々な道徳的な実践に中立的であるという意味で、道徳的な言明の真偽を判定する規準でありうる、形而上学的に強固な道徳的な事実が存在すると考えている。第3節で相対主義の是非と絡め、明らかにされるように、問われなければならないことは、まさに、道徳的な事実の存在論的な性格であり、形而上学的に強固な道徳的な事実の存否である。

表出主義の究極的な妥当性は以上のように、存在論的な問題の解決を俟たなければならない。本稿はこのように存在論的な問題の関連性を強調することで、最終的に倫理学における存在論の意義を顕揚するものである。それでは、議論の前提として、表出主義がメタ倫理学上の様々な見解の中でどのような位置を占めているか、確認することから始める。

1 表出主義のメタ倫理的な位置付け

私たちは既に本稿冒頭において、表出主義の定義を確認してある。しかし、定義のみから、表出主義がどのような点でほかのメタ倫理学上の見解と異なっているかということまで、明らかにされるといわけではない。私たちは本節において、表出主義がほかメタ倫理学上の主義主張とどのように差別化されるか、確認することに努める。手がかりは道徳的な実在論対反実在論の構図にあると考えられる。

道徳的な実在論はしばしば次のように定式化される。すなわち、道徳的な実在論は道徳的な言明が真理適合的であり、しかも、実際、真の道徳的な言明が存在するという見解であると言われる (Sayre-McCord 1988: 5) (Smith 2000: 15-16)。実在論者に言わせると、道徳的な言明は世界のあり様を記述するものであり、真偽を評価することができる。また、「子供の虐待は不正である」のように、真の道徳的な言明が存在する。

他方、倫理学における反実在論は道徳的な実在論の否定であるから、次のように、二つの形態が考えられる。反実在論の第一の形態は、道徳的な言明に真理適合性を認めるものの、真の道徳的な言明は存在しないという誤謬説 (error theory) である (Mackie 1977: 35)。人々は道徳的な判断を下すときに、道徳的な動機付けを余儀なくする、客観的な「なされるべきである」という特性 (to-be-doneness) を暗黙のうちに想定している。だから、たしかに、道徳的な言明は真理適合的である。なぜならば、道徳的な言明において想定される特性と、実在の特性が対応するとき、道徳的な言明は真であると評価できるし、逆に、両者が対応しないとき、道徳的な言明は偽であると評価できるからである。しかし、誤謬説を唱えるマッキーは形而上学的に自然主義者であり、自然的な特性以外の特性が存在することを認めない。道徳的な言明の暗示する、動機付けを余儀なくするという意味で「非自然的な」特性は存在しない。道徳的な言明の想定している特性は実在

しない。したがって、道徳的な言明はすべて偽である。

誤謬説は以上のように、道徳的な真理の余地を認めない。道徳的な言説は体系的に偽である。私たちの道徳的な言明は幻想・迷信を表現するものすぎない。しかし、道徳的な言明は幻想・迷信を表現するものであるかぎり、本来、行為者の指針となりえないはずである (Wright 1995: 210)。誤謬説の信奉者は道徳的な言明が行為の指針として機能することなどできないという誤謬説の含意を受け入れなければならない。たとえば、「男色は不道徳である」という信念が幻想・迷信にすぎないと認めていながら、同性愛者を迫害することは奇矯な振る舞いに見える。しかし、誤謬説の信奉者に言わせると、「子供の虐待は不正である」も「男色は不道徳である」も道徳的な言明であるかぎり、同じように偽である。したがって、「子供の虐待は不正である」という信念に基づき、子供を虐待する親を告発することも奇矯な振る舞いであると言わなければならない。誤謬説のこのような含意が尤もらしくないと考える人々は、誤謬説を受け入れることをためらうかもしれない。

「反实在論の二つ目の形態は非認知主義 (noncognitivism) である。倫理学における非認知主義とは、「道徳的な言明は真理適合的ではない」という見解である。非認知主義の典型が情緒主義である。既に確認してあるように、情緒主義者に言わせると、「子供の虐待は不正である」は「子供の虐待反対!」と同じように、真偽を評価できない。

情緒主義からの帰結の一つは、道徳的な矛盾など存在しないということである。ある行為者が「子供の虐待は不正である」と言い、別の行為者が「子供の虐待は不正ではない」と言うとき、両者の発言は、矛盾しているように見える。しかし、情緒主義者に言わせると、矛盾は単に見かけ上のものである。道徳的な発話において、発話者はそれぞれ自分自身の態度を表明しているにすぎない。ある行為者が子供の虐待に反対するときに、別の行為者が子供の虐待に反対しないということは格別、矛盾として指弾される事態ではない。

しかし、少なくとも外見上、道徳的な矛盾が存在することは否定できない。道徳的な矛盾の存在は、私たちの道徳的な経験に認知的な側面があることを意味する。情緒主義者は道徳的な経験の認知的な側面が外見以上のものではないと考え、表出主義者は情緒主義者と異なり、道徳的な経験の認知的な性格を保存する可能性を追い求める。たしかに、表出主義者も情緒主義者と同様に、道徳的な言明が世界のあり様を記述しないと考える。しかし、表出主義者は最早、「子供の虐待は不正である」と「子供の虐待反対！」を同一視しない。したがって、道徳的な言明に真理適合性を認める可能性が開かれる(一)。

また、表出主義者は誤謬説と差別化するために、「子供の虐待は不正である」のように、真の道徳的な言明が存在することも認める。表出主義者は道徳的な言明が真理適合的であると認め、しかも、真の道徳的な言明の存在も認める。したがって、上述の道徳的な実在論の定式化に照らすと、表出主義はまさに、実在論に分類される。本節は最後に、表出主義が旧来からの道徳的な実在論とどのように差別化できるかということ明らかにする。

手がかりはダメットにある。ダメットは言説の検証可能性 (verifiability) の観点から、意味論的に実在論・反実在論を定式化する。ダメットの定式化から、表出主義と道徳的な実在論が伴に真の道徳的な言明の存在を認めながら、道徳的な真理の検証可能性の点で意見を異にしているという可能性が示唆される。

ダメット流に定式化すると、道徳的な実在論は道徳的な言明が真、あるいは、偽であり、しかも、検証不可能である可能性を認める見解である。また、「反実在論は実在論の否定であるから、道徳的な言明が真、あるいは、偽であるときに、検証可能であることが必然的である」という見解である。ダメット流の定式化は道徳的な言明の真理値がどのような意味で客観的かということを問うものである。今、道徳的な実在論が関与していると言われている真理値の客観性とは、私たちが道徳的な言明の真理値を知る手段・証拠に依存しないという意味の客観性である。道徳的な言明は私たちの認識から独

立に存在する実在により真偽何れかであるという意味で客観的な真理値を持たなければならない。実在論・反実在論は証
拠超越的な真理に関与するかどうかという事で分けられる(2)。

表出主義者に言わせると、道徳的な真理は何らかの特定の道徳的な実践に内在的に構成される、価値負荷的なものであ
る。道徳的な真理とは、道徳的な実践の内側において正当化されること以上ではない。したがって、道徳的な言明が私た
ちの検証・正当化を俟たないで、真、あるいは、偽であることなどない。他方、道徳的な実在論者は道徳的な真理が道徳
的な実践に依存するという意味で、価値負荷的であるなどと考えない。道徳的な真理と検証可能性・正当化可能性の連関
は少なくとも表出主義者の考えるほど、直接的ではない。道徳的な言明は私たちの道徳的な実践と無関係に、真、あるい
は、議であることが可能である。以上のように、道徳的な真理の検証可能性・正当化可能性の観点から表出主義と道徳的
な実在論を対照することができる。倫理学においてダメット流の定式化から引き出すことのできる教訓は、表出主義を道
徳的な実在論と区別する形で、反実在論として位置付けることのできる枠組みがあるということである。

表出主義はダメット流の反実在論として、道徳的な実在論と差別化することができる。また、既に見てあるように、表
出主義は誤謬説・非認知主義と差別化することもできる。したがって、表出主義は道徳的な実在論・誤謬説・非認知主義
と異なる、メタ倫理学上の新たな選択肢でありうるということが出来る。

2 道徳的な真理の可能性

表出主義者は道徳的な実在論・誤謬説・非認知主義と差別化するために、表出主義独自の観点から、道徳的な言明の真

理適合性と道徳的な真理の可能性を認めることができなければならない。

まず、道徳的な言明の真理適合性から。道徳的な実在論者に言わせると、道徳的な言明は真理適合的であるために、形而上学的に強固な道徳的な事実を記述するものであると想定されなければならない。道徳的な言明は記述に対応する形而上学的に強固な道徳的な事実が実在するという意味で、記述が的確であるときに、真であると評価できるし、また、記述が的確ではないときに、偽であると評価できる。しかし、表出主義者は道徳的な言明が真理適合的であるための条件を引き下げる。道徳的な言明の記述的な性格は最早、真理適合性の条件ではない。表出主義者の掲げる条件は次の二つである（cf. Smith 2000: 19-20）。

①構文論上、条件法・否定などの真理関数的な文脈に埋め込める特徴を持っていること。

②ルイス・キャロルの詩句（「それはゆうとろどき、ぬるやかなるトーヴたち、まんまにぐるてんしつ、ぎりねんす」、高橋康也訳）のように無意味ではないこと。

以上の条件は何れも所与の言明の表面的な特徴から読み取れるので、ミニマリステックであると言われる。道徳的な言明は二つの条件を満足するので、真理適合的である。「子供の虐待は不正である」は条件法に埋め込み、「子供の虐待が不正であるならば、……」と言うことができる。また、否定に埋め込み、「子供の虐待は不正ではない」と言うこともできる。さらに、「子供の虐待は不正である」はキャロルの詩句のように無意味ではない。したがって、道徳的な言明はミニマリステックに真理適合的である。

表出主義者に言わせると、結局、「子供の虐待は不正である」は「子供の虐待反対！」と同一視されないかぎりで、真理適合的である。キャロルの詩句のように、法外な言明はほとんどない。また、道徳的な言明は大半が平叙文で表現される。命令文・感嘆文などのように、真理値を持たない文で表現されることはほとんどない。だから、ほとんどあらゆる道

徳的な言明が自動的に真理適合的であると認められる。したがって、徳的な言明の真理適合性を争うことの意味は失われてしまっている。

問題は徳的な言明の真理適合性より、むしろ、徳的な真理である。表出主義者はミニマリステイックな真理論に訴える。ミニマリステイックな真理論の基本は大凡、次のようにまとめられる。「『子供の虐待は不正である』は真である」という真理帰属の条件、すなわち、「子供の虐待は不正である」に「真である」と述語付ける条件は、「子供の虐待は不正である」と主張する主張可能性が正当化されることである。真理認識の基礎は「『子供の虐待は不正である』が真であるのは、子供の虐待が不正である場合、そして、その場合にかぎられる」という同値図式である。だから、実在との対応などさらなる基礎を想定しないとしても、真理述語の使用を説明できる。「真である」を理解するために、「子供の虐待は不正である」という言明と対応する、形而上学的に強固な事実に想定する必要はない(Horwich 2001: 559-560)。ミニマリステイックな真理論において、真理性は正当化される主張可能性(warranted assertibility)と区別されない(3)。

以下、第2節と第3節で、ミニマリステイックな真理論が表出主義の文脈において、どのように活用されているかというものを具体的に検討する。取っ掛かりとしてヘアを取り上げ、また、同じく表出主義の一翼を担うブラックバーンとテイモンズの議論で、ヘアの論点を補強する。ただし、表出主義者相互の間にある細かな差異は無視する。表出主義の基本線を示すことに努める。

まず、非記述主義を唱えるヘアである(Hare 1997: 56)。記述主義(descriptivism)とは、「徳的な言明の意味が構文と真理条件により決まる」という見解である。他方、非記述主義(nondescriptivism)とは、「徳的な言明の意味に構文と真理条件により決められない部分がある」という見解である。ヘアに言わせると、徳的な言明は記述的な意味と評価的な意味を併せ持つ。後者の、評価的な意味とは、徳的な言明の発話による態度の表出である。表出主義者は「子供の

虐待は不正である」という発話において、発話者は子供の虐待に反対する態度を表出すると解釈する。しかし、「子供の虐待は不正である」と発話しながら、腰が引けていることもあるし、また、「子供の虐待は不正である」と発話することなく、たとえば、声の調子・身振りで子供の虐待に反対する態度を表出することもできる。だから、評価的な意味は構文と真理条件により決まらない。したがって、記述主義は斥けられる (Hare 1997: 58-59)。

しかし、態度の表出は勝手気ままではなく、何らかの規準による。態度の表出に規準があるという意味で、道徳的な言明も真理条件を持つ。道徳的な言明の記述的な意味は道徳的な発話による態度の表出の規準を特定化するものとして位置付けられる (Hare 1997: 54)。たとえば、行為者Xが「行為者Yはよい」と言い、XがYをほめている。「『態度の表出』という状況を考えてみる。XがYをほめるのは、Yが親切・寛容で、トランプでいんちきをしないからであるとする。「Yはよい」という道徳的な言明の真理条件は、Yが親切・寛容・トランプでいんちきをしないなどの条件を満たすことである。Yが以上の条件を満たしているとき、「Yはよい」は真である (Hare 1997: 58)。

上の例で「Yはよい」の真理条件は既にして「親切・寛容・トランプでいんちきをしないなどの条件を満たす行為者はよい」という道徳的な言明である。道徳的な言明の真理条件は既にして実質的に道徳的である。私たちは「親切・寛容・トランプでいんちきをしないなどの条件を満たす行為者はよい」という道徳的な実践に関与することで初めて、「『Yはよい』は真である」と語ることができる。「Yはよい」の真理性は、「親切・寛容・トランプでいんちきをしないなどの条件を満たす行為者はよい」という道徳的な実践の内側からのみ見出されるものである。逆に、たとえば、「親切・寛容・トランプでいんちきをしないなどは、柔弱な精神の現れにすぎない」という道徳的な実践に関与するかぎり、「『Yはよい』は真である」と語られることもない。

私たちはヘアの議論から次のような結論を引き出すことができる。すなわち、道徳的な言明に「真である」と述語付け

ることは、道徳的な実践の外から、道徳的な実践と無関係に、形而上学的に基礎付けられる真理概念を二階の概念として適用することではない。道徳的な真理は一階の概念である。道徳的な言明が真であるとは、道徳的な言明が道徳的な実践を構成する内在的な規準に適い、したがって、ある適切な道徳的な見地に対応するので、恣意的ではないことである。結局、道徳的な言明が真であるとは、当の道徳的な言明が道徳的な実践の内側において、正当化されることである。以上のように、道徳的な言明の真偽と正当化可能性が結び付けられるので、表出主義はダメツト流の反実在論の一形態と見なすことができる。

道徳的な真理は一階の概念であるので、『子供の虐待は不正である』は真である」という主張は、「子供の虐待は不正である」という主張と同じである。ブラックバーンの言うように、道徳的な言明に「真である」と述語付けることは、当の道徳的な言明を再肯定すること以上ではない⁽⁴⁾ (Blackburn 1998: 295) (Blackburn 2000: 42)。

3 道徳的な事実の存在論的な性格

表出主義者に言わせると、道徳的な真理は道徳的な実践に内在的に捉えられるものである。しかし、道徳的な実践は必ずしも一枚岩ではない。私たちは普通、『女性は教育を受けるべきではない』は偽である」と語っている。しかし、イスラム原理主義者は実際、『女性は教育を受けるべきではない』は真である」と語っている。したがって、表出主義者は相対主義者と同様に、『女性は教育を受けるべきではない』は私たちにとって偽であるとしても、原理主義者にとって真である」と言わなければならないように見える。

しかし、表出主義者は相対主義を斥ける。「女性は教育を受けるべきではない」は端的に偽である。なぜならば、「女性は教育を受けるべきではない」は非人道的で、残酷で、恣意的であるので、正当化されないからである (Blackburn 2000: 42)。

たしかに、「非人道的で、残酷で、恣意的な行為は不正である」という道徳的な実践は尤もらしい。そして、「非人道的で、残酷で、恣意的な行為は不正である」という道徳的な実践において、「女性は教育を受けるべきではない」は反証され、「女性は教育を受けるべきではない」は偽である」が正当化される。しかし、原理主義者は「非人道的で、残酷で、恣意的な行為は不正である」という道徳的な実践を共有しないかもしれない。それでも、表出主義者は相対主義に屈しない。なぜならば、ティモンズの言うように、道徳的な言明は定言的な (categorical) 性格を持っているからである⁽⁵⁾。道徳的な言明の定言性は次のように、道徳的な真理の相対化の否定を意味する。すなわち、私たちは道徳的に主張することで、自分自身の道徳的な主張を押し立て、異なる道徳的な主張に反対する。自分自身の道徳的な主張と衝突する主張は否定される。だから、自分自身の道徳的な主張と衝突する主張は端的に偽である。私たちの道徳的な主張と衝突する主張がある特定の人々にとって真であると言われることもない。私たちは自らの主張と衝突する主張に何程の真理性も認めない。相対的な真理性という限定的な真理性も認めない (Timmons 1999: 142)。

もちろん、私たち自身が誤っている可能性を排除することはできない。だから、「子供の虐待は不正である」が本当に真であり、「女性は教育を受けるべきではない」・「男色は不道徳である」が本当に偽であることを確認するために、私たちは自分自身の道徳的な実践という「ノイラートの船」のある部分を占めながら、別の部分を吟味する作業を続けなければならぬ (Blackburn 1998: 317-318)。

道徳的な真理は絶対確実に基礎付けられるものでなく、ある種、暫定的なものである。表出主義者は以上のように、道

徳的な真理のノイラト的な性格を強調することで、普遍主義と相対主義を伴に斥ける。私たちの徳的な実践は一枚岩ではなく、穏やかな多様性を許容している。したがって、私たちの徳的な実践は普遍主義者の言うように、少数の規範的な原理原則の体系に収斂するものではない。他方で、徳的な実践の多様性から、相対主義が導き出されるというわけでもない。徳的な実践の中で認められるものは絶対確実ではないとしても、真理として押し立てることができからである。

しかし、私たちの徳的な実践は根本的に誤っているかもしれない。私たちの徳的な実践に内在的に構成される真理は、実際は幻想・迷信にすぎないかもしれない。表出主義者は誤謬説と差別化するために、徳的な実践が幻想・誤謬ではなく、徳的な真理を構成する所以を語ることができなければならない。表出主義者は何故に徳的な真理が可能か、何故に私たちの徳的な実践が徳的でありうるか、答えなければならない。以上の問いは徳的な実践に内在的に答えることができないと言われるかもしれない (Maggi 2002: 162-163)。しかし、表出主義者に言わせると、あらゆる徳的な語りは既にして何らかの徳的な実践に内在的である。あらゆる徳的な実践に外在的に、自らの徳的な実践の徳性を語るなどできない。したがって、私たちは自らの徳的な実践の内側から、自らの徳的な実践を正当化することで、満足しなければならない。

同じ論点が相対主義の是非に係わっている。相対主義者はあらゆる徳的な実践に外在的に語らなければならない。裏を返すと、徳的な実践に内在的に語るかぎり、相対主義の成り立つ余地はない。その理由は以下の通りである。相対主義者は『『女性は教育を受けるべきではない』は原理主義者にとって真である』と語る。しかし、『真である』が徳的な実践に内在的に理解されるかぎり、『女性は教育を受けるべきではない』は原理主義者にとって真である』の語り手は既にして原理主義者の徳的な実践に関与していると言わなければならない。『真である』は定言的であるから、同じ語り

手が『女性は教育を受けるべきではない』は偽である」と語ることはできないはずである。しかし、相対主義者は『女性性は教育を受けるべきではない』は「私たちにとって」偽である」と語らなければならない。だから、相対主義は道徳的な真理が道徳的な実践に内在的に構成されるというミニマリステックな真理論と両立できない。

相対主義者は様々な道徳的な実践に中立的に、『女性は教育を受けるべきではない』は私たちにとって偽であるとしても、原理主義者にとつて真である」と語らなければならない。『女性は教育を受けるべきではない』は私たちにとつて偽であるとしても、原理主義者にとつて真である」という道徳的な事実は、様々な道徳的な実践に中立的で、特定の道徳的な実践に依存しないという意味で、形而上学的に強固な道徳的な事実でなければならない。他方、表出主義者に言わせると、あらゆる道徳的な実践に外在的に語ることは不可能である (Backlund 1996: 89)。私たちが人間の道徳的なあり様とは、既にして道徳的な実践に関与しているというあり様である。私たちは道徳的な実践に内在的に語るのみである。だから、道徳的な事実は道徳的な実践に内在的に構成される、価値負荷的な事実であらざるを得ない。以上のように、相対主義を廻る応酬を見てくると、真の係争点は道徳的な事実の存在論的な性格であると言いうことができる。

4 結語

表出主義者は言語行為論における発語内行為と類比的に道徳的な動機付けを理解する。たとえば、「飢餓救済に寄付することは正しい」という発話において、発話者は自分自身を飢餓救済の寄付に動機付けるといふように。したがって、動機付けを余儀なくする、非自然的な特性を想定する必要もない。表出主義は動機付けを余儀なくする特性が組み込まれて

いるという意味で、道徳的な実践と無関係に存在する強固な道徳的な事実を想定せずに済ませる消去主義 (eliminativism) である。逆に、道徳的な実在論者は道徳的な実践と無関係に、道徳的な事実の位置を示さなければならない。所謂、「位置付け問題 (location problem)」である (Jackson 1998: 5)。

表出主義者の言うように、あらゆる道徳的な実践に外在的に語るなどできないとすると、私たちは道徳的な実践に内在的に語るほかない。したがって、道徳的な事実も道徳的な実践の内側から見出されるほかない。逆に、形而上学的に強固な道徳的な事実の存在は、あらゆる道徳的な実践に外在的に語る可能性を含蓄する。したがって、表出主義の究極的な妥当性は形而上学的に強固な道徳的な事実という存在論的な問題の解決を俟たなければならないと言いうことができる。

倫理学における存在論は決して不毛な営みではない。道徳的な事実は存在するとしても、自然的な事実のように、直接的に観察することなどできないと言われるかもしれない。しかし、たとえば、道徳的な事実の説明上の役割に注目することで、私たちは道徳的な事実の存在に迫ることができる。「人種隔離政策が道徳的に不正であるから、政治的に不安定な状態が続いた」という因果的な説明に見られるように、ほかのある、自然的な事実、「不安定な政情」を説明するために、道徳的な事実と訴えることが適正であると考えるとき、私たちは道徳的な事実が実在すると言える。逆に、道徳的な事実が説明上、完全にイレリヴァントであると考えられるとき、道徳的な事実の実在性も疑われる。また、道徳的な実践を共有しない人々が同じように、道徳的な事実と訴える説明の妥当性を認めるとき、道徳的な事実は形而上学的に強固であると言いうことができる。逆に、道徳的な実践を共有しない人々の間で、道徳的な説明の妥当性の評価が分けられるとき、道徳的な事実は道徳的な実践に内在的に構成される、価値負荷的なものにすぎないかもしれない。何れにしても、道徳的な説明の問題は存在論的に読み替えることができる。したがって、道徳的な事実が直接的に観察できないとしても、私たちは道徳的な事実の存否という存在論的な問題に取り掛かることができる。

本稿の議論を振り返っておく。まず、第1節で、表出主義のメタ倫理的な位置付けを確認した。表出主義はダメツト流の反実在論者の一選択肢として、道徳的な実在論・誤謬説・非認知主義と区別される独自の地位を占める。次に、第2節で、表出主義者がミニマリスティックな真理論に訴えることで、道徳的な真理の可能性を説明することを確認した。道徳的な真理は道徳的な実践に内在的に構成される、価値負荷的な真理であると言われる。最後に、第3節で、表出主義者が道徳的な事実の存在論的な性格を廻る論点を提起するものであることを明らかにした。表出主義者に言わせると、私たちは道徳的な実践に内在的に語るほかなく、したがって、道徳的な事実も道徳的な実践の内側からのみ見出される。他方、表出主義に反対する人々に言わせると、私たちはあらゆる道徳的な実践に外在的に語ることが可能であり、したがって、様々な道徳的な実践に中立的で、道徳的な実践に依存しないという意味で、形而上学的に強固な道徳的な事実を想定することができる。以上から、表出主義の究極的な妥当性は形而上学的に強固な道徳的な事実の存在を否認する反実在論の妥当性に左右されると結論付けることができる。

- Blackburn, S., 1984, *Spreading the Word: Groundings in the Philosophy of Language*, Clarendon Press: Oxford.
- Blackburn, S., 1996, 'Securing the Nots: Moral Epistemology for the Quasi-Realist', in Smoot-Armstrong, W., Timmons, M., eds., *Moral Knowledge?: New Readings in Moral Epistemology*, Oxford UP, New York & Oxford, pp.82-100.
- Blackburn, S., 1998, *Ruling Passions: A Theory of Practical Reasoning*, Clarendon Press: Oxford.
- Blackburn, S., 2000, 'Relativism', in LaFollette, H., ed., *The Blackwell Guide to Ethical Theory*, Blackwell Publishers: Malden, Massachusetts & Oxford UK, pp.38-52.
- Dancy, J., 1998, 'Two Conceptions of Moral Realism', in Rachel, J., ed., *Ethical Theory: The Question of Objectivity*, Oxford University Press: Oxford, pp.227-244.
- Hale, B., 1997, 'Realism and Its Oppositions', in Hale, B., Wright, C., eds., *A Companion to the Philosophy of Language*, Blackwell Publishers: Oxford UK & Malden, Massachusetts, pp.271-308.
- Hare, R. M., 1997, *Sorting Out Ethics*, Clarendon Press: Oxford.
- *Horgan, T., Timmons, M., 2000, 'Nondescriptivist Cognitivism: Framework for a New Metaethic', *Philosophical Papers*, 19, 2.
- Horwich, P., 2001, 'A Defense of Minimalism', in Lynch, M. P., ed., *The Nature of Truth: Classic and Contemporary Perspectives*, The MIT Press: Cambridge, Massachusetts & London, pp.559-577.
- Jackson, F., 1998, *From Metaphysics to Ethics: A Defence of Conceptual Analysis*, Clarendon Press: Oxford.
- Mackie, J. L., 1977, *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books: Harmondsworth, Middlesex.
- Magri, T., 2002, 'Frères Ennemis: The Common Root of Expressivism and Constructivism', *Topoi*, 21, pp.153-164.
- Sayre-McCord, G., 1988, 'Introduction: The Many Moral Realisms', in Sayre-McCord, G., ed., *Essays on Moral Realism*, Cornell UP, Ithaca, pp.1-23.
- Smith, M., 2000, 'Moral Realism', in LaFollette, H., ed., *The Blackwell Guide to Ethical Theory*, Blackwell Publishers: Malden, Massachusetts & Oxford UK, pp.15-37.
- Timmons, M., 1999, *Morality without Foundations: A Defense of Ethical Contextualism*, Oxford UP, New York & Oxford.
- Wright, C., 1995, 'Truth in Ethics', *Ratio*, 8, 3, pp.209-22.

- (1) 表出主義は非記述主義的な認知主義である。道徳的な言明は主張的な (assertoric) 内容、すなわち、認知的な内容を持つ。しかし、道徳的な言明の認知的な内容は記述的な内容ではない。したがって、主張的な内容を持つ言明は、記述的な言明にかぎられない (Timmons 1999: 131) (Horgan, Timmons 2000)。
- (2) ダンシーに言わせると、道徳的な実在論は道徳的な特性が実在的な特性であるという見解であり、強弱二つの形態を考へることができる。弱い実在論者は道徳的な特性の実在性が特定の経験からの独立性のうちに成り立つと考へる。他方、強い実在論者は道徳的な特性が経験可能性、あるいは、人間の反応に依存しないという意味で、実在的であると考へる。ダンシーは強い実在論を支持し、マクダウエルのように、価値を色などの「第二性質」に擬する実在論は弱い実在論にすぎないと批判する (Dancy 1998: 227-228)。強い実在論は証拠超越的な真理に関与すると考へられる。
- (3) ライトは真理性と正当化される主張可能性が潜在的に外延を異にすることを論証している。したがって、真理性と正当化される主張可能性の同一視は拙速である。しかし、両者は規範的な力において一致する (cf. Hale 1997: 292-293)。
- (4) 以上のような事態を、ブラックバーンは比喩的に「ラムジの梯子は水平である」と形容する。すなわち、真理述語を使用することで、意味論的に「上昇」することはできないと言われる。
- (5) ヘアは道徳的な言明の記述的な意味という残滓に感わされ、指令主義に普遍主義という箍を嵌める。しかし、相対主義を克服するために、表出主義者は道徳的な言明の定言性で事足りる。

・ 本稿は文部科学省科学研究費補助金・特別研究員奨励金の研究成果である。